

(玉竜) : 薩摩という国・・・その6

崎元雄厚 2010.11.13(N0.1-24)/ 2013.9.30

脱稿

- 1 はじめに
- 2 日本文化の概説
- 3 南方系文化
- 4 照葉樹林文化
- 5 歌垣・夜這い
- 6 郷中教育
- 7 ボーイスカウトと郷中教育
- 8 薩摩人の性質、長所及び欠点
- 9 生麦事件と薩英戦争で見た薩摩人の気概
- 10 薩摩人の心意気
- 11 薩摩と中央政府
- 12 パリ万博
- 13 ペリー以前にやってきたフランスの黒船
- 14 明治維新と薩摩
- 15 調所笑左衛門と浜崎太平次の活躍
- 16 薩摩人の評価
- 17 なぜ薩摩は西南戦争後急速に衰退したか
- 18 日の丸と島津斉彬
- 19 麦飯男爵：高木兼寛
- 20 議を言うな
- 21 酒とおなごでごわす
- 22 ソイ・ソース
- 23 シラスの下に先隼人族遺跡？
- 24 玉竜への期待

一応脱稿

- 25 日新公と「いろは歌」
- 26 「いろは歌」と郷中教育のはじまり
- 27 琉球・奄美大島
- 28 薩摩と琉球・奄美大島の支配
- 29 奄美諸島について
- 30 奄美の黒砂糖と薩摩藩財政に占める比重
- 31 琉球貿易
- 32 琉球・奄美の貢献

- 33 「薩摩の黒舟」 沖縄は本土より 7 年前に開国
- 34 小松帯刀の跡目用紙とお千賀との結婚
- 35 小松帯刀とお琴の純愛
- 36 焼酎「大警視」(修正中)・・別添
- 37 斉彬と勝海舟
- 38 一寸御免
- 39 薩摩藩士の対決 (修正中、後半未完成)・・別添
- 40 薩摩人と長州人
- 41 西郷さんの逸話
- 42 西郷さんの逸物
- 43 薩摩切子
- 44 ペリー艦隊の黒船に乗って浦賀にやってきた日本人 (要大幅修正。朱印船と日本の海外進出、幕府による海外渡航と邦人帰国禁止令、大型船建造禁止令と脆弱な和船、遭難と難民等に分割のこと)
- 45 薩摩琵琶「城山」と勝海舟
- 46 西南戦争最前線における薩摩軍兵士と官軍兵士の口合戦

これから

- 47 島津の殿様：[重豪・斉興・斉彬・久光]
- 48 島津家の華麗な閨閥：[公家、将軍家、諸大名]
- 49 薩摩藩の財政：[米の実収入は見掛け上の石高の半分、経済的には最貧国]
- 50 薩摩藩の身分制度：[時限爆弾]
- 51 薩摩藩の士族：[全国平均の約 5 倍の士族を抱えていた,]
- 52 調所広郷の財政立て直し

- 53 天保の飢饉と大不況
- 54 「天保の改革」への取り組み：[明暗を分けた薩摩等西南雄藩と幕府]
- 55 薩摩藩と長州藩の反目と和解：[公武合体派と尊王攘夷派の対決、8.18 の変]
- 56 薩摩が歴史の主役に躍り出た事件：[久光の文久の変と生麦・薩英戦争]
- 57 薩摩の対朝廷、対幕府工作
- 58 薩長同盟・薩土同盟
- 59 薩摩の教育制度 [日本一の貧乏県の財力不足を反映して、最定数の藩校、寺小屋数が全国最低、しかも極端に少ない]
- 60 薩摩の一向宗弾圧
- 61 幕府に強要された薩摩藩の大規模普請：[静岡の安倍川の薩摩堤防と岐阜の木曾川工事]

- 62 薩摩の金山

- 63 南北戦争と薩摩商人：〔浜崎太平洋次による綿花・武器貿易で荒稼ぎ、藩の軍資金〕
- 64 維新時の薩摩藩の行動様式
- 65 薩摩人の特性：集団性と独立独歩タイプ
- 66 示現流
- 67 郷中教育の功罪
- 68 郷中教育と英国のパブリック・スクール
- 69 海軍兵学校・防衛大名物の棒倒し：〔郷中教育の「大将盗り」が原型〕
- 70 精忠組の面々
- 71 桜田門外の変と精忠組
- 72 寺田屋事件
- 73 生麦事件：〔国際法に照らしてみると〕
- 74 薩英戦争後の薩摩・日本と英国の関係：〔英国パークス大使の薩摩訪問ほか、薩摩の接待費用 3 万両〕
- 75 大政奉還：〔小松帯刀の活躍〕
- 76 薩摩と鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争
- 77 薩摩と版籍奉還
- 78 薩摩と廃藩置県：〔西郷隆盛の力〕
- 79 薩摩派遣英国留学生：〔サツマ・フィフティーンの留学費用；一人当たり 2,700 万円。鹿兒島中央駅前の銅像から何故か薩摩藩に亡命した土佐藩出身の留学生が外されている。この行為は祇園の洲からの官軍墓地の撤去と同様薩摩の恥ではないか〕
- 80 薩英戦争における薩摩人の対英交渉：〔英国もたじたじ；重野安鐸・大久保の外交交渉〕
- 81 誤解されている征韓論
- 82 英国医ウイリアムスと薩摩：〔鹿大医学部、日本の医学教育〕
- 83 西郷による明治天皇の教育：〔(女官を避け山岡鉄舟、村田新八等を配置)、大奥および宮中女官による教育の弊害防止〕
- 84 錦の御旗：〔大久保利通と芸者の帯〕
- 85 薩摩の人物概観
- ① 維新時の殿様：島津斉彬、島津久光
 - ② 維新の立役者：小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通
 - ③ 政治家：黒田清隆、松方正義、山本権兵衛
 - ④ 外交官：寺島宗則、鮫島尚信
 - ⑤ 実業家：浜崎太平洋次、五大友厚
 - ⑥ 役 人：村橋久成、前田正名
 - ⑦ 海軍：川村純義、西郷従道、伊東祐亭、上村彦之丞、東郷平八郎、山本権兵衛、
 - ⑧ 陸軍：大山巖、黒木大将、篠原国幹、樺山資紀、川上操六、牛島満
- 86 島津斉彬の先見力

- 87 ジゴロ島津久光
- 88 幻の宰相 小松帯刀
- 89 敬天愛人の西郷隆盛

- 90 ソリの合わなかった西郷と久光
- 91 近代日本の建設者：〔大久保利通〕
- 92 西郷従道と大山巖
- 93 世界海軍3大男 日本海軍の父：〔山本権兵衛〕
- 94 飯焦がし：〔武士道の美談－伊東祐亭連合艦隊長官と清国北洋艦隊長官丁汝昌〕
- 95 国際法と東郷平八郎連合艦隊長官
- 96 黒木大将
- 97 薩摩の外交官：〔条約改正の鬼寺島宗則と外交官1号鮫島尚信〕
- 98 関西財界生みの親五大友厚
- 99 使命感に燃えた北海道の恩人村橋久成：〔薩摩英国留学生、サッポロビール〕
- 100 殖産興業の父前田正名
- 101 麒麟児村田新八
- 102 未知数の男篠原国幹
- 103 有馬新七
- 104 篤姫
- 105 創設期の近衛軍と薩摩
- 106 薩摩人と兵器開発：〔村田銃、伊集院信管 その他〕
- 107 私学校
- 108 西南戦争の原因と歴史的意義
- 109 田原坂の戦い：〔物量戦〕
- 110 抜刀隊
- 111 江戸幕府の老中たち
- 112 朝廷：天皇と主な公家
- 113 維新前後の有力大名
- 114 尊皇攘夷と開国
- 115 尊皇攘夷論の国民的支持
- 116 当時の惨めな状態の朝廷と復古運動
- 117 朝廷を巡る外交戦：倒幕藩と幕府
- 118 水戸学
- 119 国学（平田篤胤）・朱子学（林羅山）・陽明学（中江藤樹、佐藤一斉）
- 120 鈴木正三と石田梅岩（石門心学）：〔日本人の重要徳目（背骨）を構築した男達〕
- 121 日本人に大きな影響を与えた当時のベスト・セラー：〔本居宣長（古事記伝）、頼山陽日本外史）、会沢正志斎（新論）、福沢諭吉（学問のすすめ）、中村正直（西洋立志論）〕

- 122 幕政の優れた点と問題点
- 123 幕府崩壊の理由**
- 124 幕藩体制、幕末日本の国内状況（経済・財政）：〔朝廷、幕府、各藩〕
- 125 幕府の財政・経済活動
- 126 幕府の貿易
- 127 有力諸藩の経済活動・貿易
- 128 「海国図志」に対する日本、中国、韓国の反応
- 129 列強の対日接近と幕府の対応
- 130 英仏の動向
- 131 ペリー提督の沖縄・小笠原占領計画
- 132 日米和親条約、日米修好通商条約
- 133 不平等条約**：〔治外法権と関税自主権の問題点、功罪とその改正〕
- 134 幕末日本人の国際条約に対する理解度
- 135 幕末日本の交流：4つの窓口〔近年鎖国という語は海禁という語に変わりつつある〕
- 136 オランダ風説書
- 137 長崎の出島
- 138 金銀比率と外貨流出**
- 139 将軍継嗣問題
- 140 8.18の変
- 141 蛤ご門の変
- 142 船中八策・大政奉還/五箇条の成文の原案者：〔大久保一翁・勝海舟/横井小楠〕
- 143 明治維新の原因**
- 144 明治維新の流れ：〔① 幕府主導の時代、② 公武合体の時代、③ 討幕の時代〕
- 145 明治維新の世界史上の意義**
- 146 明治維新と諸外国の革命との比較
- 147 明治維新：幕末日本周辺の国際状況
- 148 明治維新の志士たち
- 149 明治維新に対する各藩の取り組み方**：〔藩の方針：長州 バラバラ、薩摩 力の集中〕
- 150 明治維新に対する各藩の姿勢に対する概説**：〔薩摩藩、長州藩、土佐藩、肥前ほか〕
- 151 明治維新の先駆者水戸藩と長州藩**
- 152 明治維新：各藩の活動 ①薩摩藩**
- 153 明治維新：各藩の活動 ②長州藩**
- 154 明治維新：各藩の活動 ③土佐藩**
- 155 明治維新：各藩の活動 ④肥前藩**
- 156 明治維新：各藩の活動 ⑤水戸藩・明治維新の先駆者、その他の藩**
- 157 明治維新：佐幕派諸藩 ⑥会津藩、庄内藩、その他の藩**
- 158 明治維新① 天界の仕組み：〔地ならしの先駆者達：頼山陽、中江藤樹、国学者、漢学者、蘭学者〕
- 159 明治維新② 思想家：〔藤田東湖・佐久間象山・横井小楠・吉田松陰〕

- 160 明治維新③ プロモーター：
 佐久間象山→勝海舟・河井継之助・吉田松陰
 吉田松陰→長州藩士
 島津斉彬・久光→小松帯刀→西郷・大久保→薩摩藩士
 勝海舟・大久保忠寛→西郷・坂本竜馬
 藤田東湖→水戸・薩摩・長州等の諸藩士
 横井小楠→橋本佐内、福井藩士
- 161 明治維新④ 中心の実働部隊
 1) 倒幕側：〔小松、西郷、大久保、木戸孝允、岩倉具視〕
 2) 幕府側：〔勝海舟、大久保忠寛、阿部正弘、徳川慶喜〕
- 162 明治維新の設計者：〔横井小楠〕
- 163 明治維新の先駆者：〔佐久間象山〕
- 164 志半ばで倒れた爽やかな長州の勇者たち：〔国司信濃、吉田稔麿、久坂玄端〕
- 165 幕府の主要人物：〔将軍、老中、大老〕
- 166 幕末高級官僚：〔小栗・川路・大久保・勝・永井・岩瀬・・・〕
- 167 幕末5人の外国奉行：〔井上清直、岩瀬忠震、永井尚志、水野忠徳、堀織利* 〕
- 168 幕府の人物 勝海舟：〔第一級の貢献者〕
- 169 幕府の人物 大久保一翁（忠寛）：〔勝と共に船中八策、大政奉還の提唱者〕
- 170 幕府の人物 阿部正弘
- 171 幕府の人物：徳川慶喜〔日本のゴルバチョフ？、維新の最大級功労者？〕
- 172 来日した米国人：〔ペリー、ハリス〕
- 173 来日した英国人：〔オールコック、パークス、アーネスト・サトウ、グラバー〕
- 174 来日した外国人：〔仏国外交官 ロッシュ〕
- 175 来日したオランダ人（長崎出島）：〔シーボルト、カッテンディーケほか〕
- 176 長崎海軍伝習所、神戸海軍操練所
- 177 お雇い外人
- 178 創成期の軍隊と外国人の指導
- 179 幕末遣欧使節団：〔幕府、諸藩〕
- 180 遣欧岩倉使節団：〔国家の進路を探る旅〕
- 181 明治憲法
- 182 教育勅語：〔アデナウアー西独首相とレーガン大統領、西園寺公望による第2の教育勅語作成案〕
- 183 志士と女達、志士の嫁さん：〔英雄色を好むの見本〕
- 184 錦の御旗：〔大久保利通と芸者の帯〕
- 185 戊辰戦争の武器：〔幕府軍、討幕軍双方の主要な武器は米国南北戦争の中古品〕
- 186 「翔ぶが如く」と司馬史観

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「薩摩という国」・・・からの抜粋

1. はじめに

玉竜を卒業と同時に薩摩を離れて半世紀が過ぎたが、薩摩人であることを誇りに思っている。誠実、明るい、てげてげ、嘘をつかない、足るを知る、性善説の信奉者などの薩摩人氣質が、源日本人と日本文化の良いところを今に伝えているように思える。

昨今の社会情勢を見ると、やたらに利己的な生き方に走り、かつて日本民族が大切にした公の精神と日本の良さはどこに行ったのであろうか。以前誰もが持っていた日本人の誇りと心棒はどこに消えてしまったのか。

我々が享受している豊かで平和な生活は、先人達の血の滲むような努力と、伝統的に教え込まれた徳育教育によるところが大きい。明治維新における薩摩の下級士族の活躍等、近代国家建設で見せた志士たちの尽力なくしては今日の日本の繁栄はありえない。我々が物質的にも精神的にも恵まれた日々を送ることができることに深く感謝しつつ、先人達の築いてくれた遺産を後輩達に繋いでいかねばならない。

一国平和主義という蝸壺生活で一人ぬくぬくと我が世を楽しんでいる日本。近隣諸国の恫喝に振り回され、馬鹿にされているのも分からない日本。明治時代の日本は貧しかったが、独立自尊・自助努力の精神に燃え、独り立ちできて外国からも尊敬されていたのに。

日本固有の文化に誇りを持ち、かつての日本人がもっていた気概、自立心、自信を取り戻そう。

我々を育ててくれた薩摩の文化、風習、歴史を振り返って幾つかの話題を選んだ。

以下はそのうちの一部である。

36 焼酎「大警視」(修正中)

鹿児島市の中心から約 3km 離れた鹿児島市皆与志町(旧伊敷村比志島)に「大警視」という名のバス停がある。「大警視」、「川路大警視」、「巡查殿」なる銘の芋焼酎が発売元の鹿児島県警本部で売られている。花のパリ行きの汽車の窓から新聞紙に包んだ「黄金もの」を投げ捨てたところ、運悪く保線夫に命中し翌日の新聞に書きたてられた「チンプン」騒動を起した薩摩隼人がいた。「○○どんのキンゴロ(金玉)」という逸話の主でもある。

一兵卒から身を起し日本の警察制度の制定という大偉業を果たし、警視総監まで上り詰めている。西南戦争では官軍の旅団長として 3,000 人の羅卒を率いて参戦したが、地元では「西郷どんの敵」として彼の親族が 7 人も殺され首を晒されたという。その男の名は平成 11 年(1999 年)になって鹿児島県警本部前に銅像が建立された「川路利良」その人である。

川路は 1834 年薩摩藩卒族(与力)の長男として伊敷村比志島で誕生し、46 才のとき東京で肺結核により死亡した。志士でいえば福井藩の橋本佐内、長州藩の広沢真臣と同年である。薩摩藩

は極めて身分階級性に厳しく、卒族は城下士はおろか郷士（外城士）より身分が一段と低く、西郷や大久保ら 40 数名の下級藩士で構成され明治維新の推進母体となった「精忠組」に入会する資格さえなかった。本来なら佩刀も出来ないほどで、一生うだつの上がない惨めな生涯を送らざるを得ない境遇にあった。

この厳しい身分制度は、同じく低い身分に属していた伊藤博文、山県有朋の活躍でも分るように、比較的緩やかな長州藩のそれと対蹠的であった。

彼はその最低の身分から強烈な向上心と自助努力で這い上がり、日本の警察制度の基礎を構築するという偉業をなし遂げた。陸軍少将の地位まで昇進し、「オイが大名か・・・」と驚いた正 5 位の大名の位（従 5 位以上）まで授与されている。武勇伝を交えながら彼の経歴を眺めてみよう。

まずは「蛤ご門の変」（禁門の変ともいう）における武功からはじめよう。この戦いで川路は、葦毛の馬に乗り陣頭指揮していた敵将来島又兵衛を射止めさせ、長州勢を撃退して戦いの流れを薩摩軍優勢に変えた。薩摩の川上助八郎が長州の陣地に突撃し敵方と斬り合いが始まろうとした時、「その勝負譲ってくれ！」と横から川路が躍り出てきた。相手は敵将国司信濃の家来で、剣の達人として有名な長州誠意隊の篠原秀太郎である。彼は見事な太刀捌きで会津、彦根の兵士の死体の山を築いていた。

川路はこの剣客を葉丸示現流のすざましい必殺ワザで討ち取った。

命拾いした川上の娘が後の総理大臣松方正義に嫁いで、生まれた女子がライシャワー元米国大使ハル夫人である。

脱線するが、1863 年から約 2 年間長州藩が「薩賊会奸」として薩摩藩に激しく敵対した時期があった。それは 1863 年に起こった七卿落ちで有名な尊攘派と公武合体派の争いである「8.18 の変」と、長州藩がこの変で追放された京都での失地回復を目指して出兵して発生した「蛤ご門の変」に由来する。

超過激尊攘活動への反対と御所への侵入防止のため、薩摩藩が公武合体派（朝廷・幕府）側について長州藩の行動を抑制したことを逆恨みしたことに起因する。

京の都の「蛤ご門の変」では幾度にも及ぶ斬り込みにより、川路の刀は 20 余箇所刃こぼれで鋸のようにささくれ立ってしまった。

戦いが終わって川路の大きな戦功に対し、薩摩軍総大将島津珍彦（久光 3 男）より新しい刀を下賜され、川路は漸く卒族の身分を超え公式に佩刀することが認められることになった。

西郷がこの勇猛果敢な川路の活躍を知るところとなった。論功行賞として「学問をしたい」という本人の希望に沿って、江戸で洋式練兵と太鼓術の研究の名目で江戸に留学する機会が与えられた。江戸では命題の研究を追及する傍ら北辰一刀流の千葉周作道場で剣を磨き、同時に自発的に江戸の社会、市政、民生、奉行所の活動などについて調査し自分の意見を加えて西郷に報告した。

この報告書により、西郷、大久保等に川路は兵家のほかに刑名家即ち法家の素質もあると認められた。後日警察制度の研究のため 1871 年にフランス留学を命じられ、それが後述する日本の警

察制度の確立に繋がることになる。一方、剣術は「警視流」の流儀となって廃れ行く日本剣道を再興させることになった。

1868年1月の鳥羽・伏見の戦いでは、伊敷村比志島の卒族70名よりなる抜刀隊を率い兵具隊の小隊長として任務である武器運搬に従事していたが、状況を見ては砲煙弾雨のなかを白刃を閃かして臨機応変に攻撃を仕掛け大きな軍功を立てた。

捕虜も40余名捕え、川路の戦功と指揮官としての優れた素質が薩軍幹部に知られるようになり、兵具奉行に昇進した。同年5月の上野彰義隊との戦いでは最大の激戦地となった黒門口の攻略に参加し、さらに7月には白河・浅川の戦いに加わった

。

「川路のキンゴロ」なる語がある。川路の冷静さと丈夫ぶりを称える言い回しだ。白河の戦いの最中、敵弾が川路の急所に命中した。流れる血潮をものともせず太刀を振りかざし奮闘したが、出血のため意識を失って倒れ野戦病院に担ぎこまれた。診察結果一物の袋（陰囊）の上部を貫通していたがタマはやられていなかった。

戦いのさなかキンゴロがだらつとぶら下がっていたので、タマには命中しなかったのだ。「さすが川路どんじゃ。

なんと肝の太か男か」と川路は一段と名を上げた。男は時として「キンタマが縮み上がった」と表現することがある。これらのことは女性には分り難いと思われるので一寸説明する。白兵戦でいざ突撃などの生きるか死ぬかのような一大事の時、金玉は緊張して袋が縮こまり少し上方に吊り上る。日露戦争で敵といざ戦闘開始という時、司令官東郷平八郎が部下に言った、「タマがちゃんとだらつとぶら下がっておるか確かめろ」。日本軍ではこの言葉は戦場で緊張をほぐすためできれば発せられている。緊張し過ぎて平常心を失うなどの警句である。

明治維新は、独裁政治を行うことなく勝者が手に入れた特権を放棄し、自ら武士階級を消滅させ四民平等の世を築き国と国民の発展向上を目指し、大政奉還(1867年、明治元年)、版籍奉還(1869年)、四民平等(1870年)、廃藩置県(1871年)、徴兵制(1873年)、秩禄処分(1875年)、廃刀令(1876年)等と矢継ぎ早に新政策を実行していった。

しかし、急激な社会変革に伴う反動も大きく、佐賀の乱(1874年)、神風連の乱・秋月の乱・萩の乱(1876年)、西南戦争(1877年、明治10年)と不平士族の乱が続いた。

維新後武士の身分が廃止され、秩禄処分さらに秩禄公債により収入は半減し、その上公債による給付金は約7年で打ち切られた。旧藩制の秩禄処分を受け継いだ新政府の秩禄費は財政の4割にも達したので、財政健全化のため士族への支援が打ち切られたのである。

幕末には、薩摩を除いて全国的には商品経済の発達に伴い、士農工商が商工農士と逆転しつつあった。相次ぐ特権剥奪に士族は生活困難となり、不満を持つ士族が増加し社会不安の状態にあった。

戊辰戦争で鹿児島から函館まで先頭に立って戦った8,300名の薩摩兵は、官軍の最強兵团であったと胸を張り論功行賞と待遇改善を期待して帰郷した。彼等を待っていた現実は厳しく、やがて

行われた藩政改革では城下士を除いて全階級の家禄の上限が大幅に削減された。城下士には従軍期間に応じて4～8石の軍功禄が与えられたが、郷士には支給されなかった。その結果、元々対立していた城下士と郷士との溝がさらに深くなっていった。参考までに述べると、1826年当時薩摩士族の構成比率は約1：10で、城下士16,794名、郷士166,837名であった。

治安維持のため政府は1871年（明治4年）2月、薩摩長州土佐から1万名の天皇直属の兵である御親兵を東京に、4月に8,000名の鎮台兵を全国4箇所に、同年10月市中警護のため3,000名の羅卒（警察官）を東京に配備した。川路は西郷から3,000名の羅卒のうち1,000名は薩摩から募集するよう命じられた。明治5年御親兵は廃止されて近衛兵に改編された。

近衛兵、羅卒の構成において薩摩士族の占める割合は大きく、羅卒では1/3を占めている。警官の「おい、こら」なる語は薩摩出身の羅卒によってもたらされ、警察官を表現する「マッポ」という言葉は「薩摩つぽ」から生まれたと言われている。薩摩士族の場合、戊辰戦争後の論功行賞やお国柄の厳しい身分制度を反映して近衛兵には城下士、羅卒には郷士が採用された。川路は低い身分のため軍隊、近衛軍への道を外された。

この厳しい身分制度は、維新の理想と現実の隙間は埋められずに残っていた。設立間もない頃の近衛兵と羅卒間の争いや西南戦争時の城下士と郷士間の軋轢で代表されるように、一見一枚岩のように見える薩摩の人的纏まりに暗い影を落としている。

廃藩置県後鹿児島県は中央政府の命令に背き税金は政府に納めず、地租改正、秩禄処分、廃刀令、太陽暦への変更も無視して半独立国の状態であった。征韓論に敗れて下野した西郷を慕って多数の薩摩人が政府や軍隊などを辞職して帰鹿した。国家の非常時に役立つ人材の育成を目的として私学校が開設されていたが、西郷の思いとは逆にそこは反政府の中心的存在となっていた。

この動きを危惧した大久保、川路は21名の警察官を帰省させ鹿児島県の情報収集に当たらせた。西郷の暗殺計画（？）が発覚し私学校生徒は激昂して蜂起を訴えたが、西郷をはじめとする幹部が抑えた。しかし急進派が鹿児島市の草牟田や磯にあった政府の火薬庫を襲撃するに到って西郷は腰を上げざるをえなくなり、明治10年2月15日「政府へ尋問の筋これあり、旧兵隊等随行して上京」として大雪の鹿児島県を出発した。西郷軍の出陣は鹿児島県上げての壮挙ではあろうが、上士には西郷党の私挙だと傍観する人もかなりいたと言われている。

この出陣に対し法治国家を目指す新政府は、当然のこととして西郷軍を賊軍として鎮圧することを決定した。政府軍の将兵には薩摩出身の軍人が少なからずいて、かつての仲間と干戈を交えることになった。この戦いが最後の不平士族の反乱となった西南戦争である。

上京に際して西郷は維新時と違って作戦に殆ど口を出すことなく、桐野利秋等の指揮に従った。西郷は政府に対する無謀な戦いの行く末を見通していた可能性が考えられるが、将兵は楽観的で東京見物に行くような気軽さで、在京の知人へ土産を託されてそれを持参する兵士もいたほどであっ

た。前熊本鎮台司令長官であった桐野元陸軍少将などは、熊本の通過に問題はなくもし鎮台の妨害があれば青竹 1 本あれば粉碎できると豪語するほどであった。田原坂で消耗戦になったとき八代に上陸した政府軍に背後を襲われ、薩摩軍は撃退されている。

西南戦争で川路は陸軍少将として 3,000 名の羅卒よりなる別働第 3 旅団を率いて戦った。官軍は鎮台兵、近衛軍、警察軍よりなり、その合計動員数は 52,000 名、死傷者 16,000 名であった。このうち警官の動員数は 9,500 名、戦死者は 670 名であった。西郷軍の総動員は約 30,000 名、死傷者は 15,000 名であった。

西郷軍は 4,000 丁の小銃、50 万発の小銃弾、約 30 門の砲を用意したが、弾薬装備等の補給が絶対的に不十分で熊本城攻防戦でもたつづく間に、体制を整え制海権を掌握し兵站の整った政府軍に一步一步と敗退していった。因みに政府軍が消費した弾薬の総数は小銃弾 3,400 万発、砲弾 7.4 万発で、圧倒的な物量の差であった。

17 日間に及んだ田原坂の戦いでは、政府軍は 1 日平均 32 万発の小銃弾と 1,000 発の砲弾を消費したといわれている。戦傷者は両軍で 3,000 名以上に達した。

田原坂で、薩摩軍が赤帽（近衛兵）と銀筋（羅卒）がなけりゃ 花のお江戸におどりこむのに、と官軍にてこずっていた。父兄や先輩達が一進一退の激戦の最中、鹿児島城下では子供達は次の歌を無邪気に歌っていたと言われている。

「大久保、川路は鯛か雑魚か 鯛（隊）に逐（お）われて遁（に）げて行く

大久保、川路の首さへ取れば 可愛い鎮台は殺しやせぬ

大久保、川路を油で揚げて 薩摩西郷どんのお茶塩気」

西郷軍はその後も負け戦で退却し続けたが、弾薬の不足は目を覆うばかりで、鍋釜寺の鐘を鋳潰しやっと 2,000 発/日の弾丸を製造した。しかし粗製のため真っ直ぐ飛ばず、飛距離もせいぜい 1 ~ 3 町程度しかなかった。最後は小石まで弾丸の代用として使用した。弾薬不足のため西郷軍は抜刀隊による斬り込みで対処せざるを得なかった。

百姓を中心として徴兵された鎮台兵は、西郷軍抜刀隊の斬り込みで度々潰走した。これに対処するため政府軍は、元会津士族などを中心とする警視庁巡查 100 人よりなる抜刀隊を編成し西郷軍に対抗した。なぜ元会津藩士が多いかといえば、会津戦争の仇を晴らすため、警視庁抜刀隊に参加したからである。この時の戦闘を詠った有名な「抜刀隊」の歌:

「吾は官軍我が敵は 天地容れざる朝敵ぞ

敵の大將たる者は 古今無双の英雄で

これに従う兵士（つわもの）は とともに剽悍決死の士

・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

は日本最初の軍歌であり、行進曲「抜刀隊」は旧軍、自衛隊で代表的行進曲として演奏されている。なお、「田原坂」の歌「雨は降る降る人馬は濡れる 越すに越されぬ田原坂 右手に血刀左手に手綱 馬上豊かな美少年」に少年が登場する。この美少年は西郷、大久保を継ぐべき薩摩の逸材と惜しまれた村田新八の長男岩熊がモデルではないかと言われている。この役で新人は鹿児島市の岩崎

谷で、岩熊は熊本県植木で戦死している。

薩摩藩時代は顕在化していなかったが、前述した身分格差は薩摩藩の泣き所で、西郷軍の戦況が不利になった後半戦では城下士と郷士間の不和が顕在化してきた。薩摩最強の軍団と言われていた約 600 名からなる出水の郷士団ですら 6 月中旬には政府軍に投降したように、郷士隊の中には前途に見切りをつけて戦線を離脱するものが続出した。

8 月中旬延岡で西郷が「諸隊ともに進退は勝手にせられよ」と各隊幹部に言い渡したせいもあるが、この時 1 万人が政府軍に投降した。最終戦闘となった 9 月 24 日の城山での西郷軍の軍勢は僅か 300 余名で、その大部分は城下士で構成されていた。この西南戦争は、9 カ月間政府と薩摩の間で戦われた戦争であったが、薩摩が敗北することにより以後不平士族の乱は収まった。

乃木大将が明治天皇の大葬の夜自刃した原因の一つが、西南戦争で歩兵 14 連隊の連隊旗を奪われたことといわれている。その連隊旗手河原林雄大少尉を斬ったのは、西郷軍伊東隊分隊長の岩切正九郎で西南の役後吉野村の村長を務めた。

明治 4 年司法省は司法制度の調査のため 8 名をフランスを含む欧州に派遣した。その中に帝都を守る警察制度の創設を目的として川路が含まれていた。人民保護のために自主独立の気風が色濃く残っていたフランスの制度を参考に出来たことは日本にとって幸運であった。

前述した「チンプン事件」はこの調査旅行のときの出来事で、便意を催したが便所が込んでいたのであろう、列車の中でやむを得ずひざ掛けで隠しながら新聞紙に出し、丸めて窓から投げ捨て知らぬ顔を決め込んでいた。しかし保線夫に当たった「ホカホカ団子」の包紙は日本の新聞紙であることが分り翌日地元の新聞で書き立てられ騒ぎになったのだ。

川路のパリ滞在は 7 カ月で、この間警視庁、監獄、兵舎などを訪問し、組織、仕事、運営、給料など鋭意調査した。パリ大学教授のボアソナード²など法律学者の講義も聴講した。国家の根幹は法律であり、警察制度は重要な執行機関の一つであること、さらに三権分立が近代国家の骨格であり、それが西欧諸国の強さの秘密であることが次第に分ってきた。パリのポリスは尊大さがなく親切である、これは日本も見習わなければならないとの強い印象を受けた。

それまで警察は鎮台の軍隊の下に置かれており、また司法権（司法警察）と行政権（行政警察）が分離されていなかった。それらの問題解決のため、1871 年帰国報告書で内務省の設置の必要性を建議した。司法省に提出した「警察制度についての建議」は、日本の近代警察の原点になったのである。同年内務省が設置され大久保利通が内務卿に、川路が警視庁の大警視に任命された。警察権は内務省の、さらに司法権は司法省の管轄下に分離されることになった。

川路は西郷に認められてエリートコースを駆け上ってきた。ヨーロッパで警察制度を研究したとき、整った法制度と官僚制度で国民を統治している彼等のやり方を見て日本も見習うべきであるとし、同じ考えの大久保利通に共感を持つようになった。

川路は寝食を忘れて亡くなるまで睡眠時間は4時間という仕事一筋の生活を続け、近代的警察制度の確立に邁進した。大久保同様清廉潔白で蓄財もなかった。信賞必罰で厳しく規律を維持し、絶えず現場を見回り、部下と同じ厳しい環境下で激務に耐えた。事故犠牲者のもとには必ず駆けつけた。

司法省に提出した「警察制度についての建議」は、日本の近代警察の原点になったのである。「警察手眼」という非常に格調の高い口述録がある。これについて加来耕三著の「日本警察の父川路大警視」から以下に引用する：「警察論語」とも、バイブルとも呼ばれた大警視川路利良の口述録「警察手眼」は、川路自身も意識したように、警察官のみならず全公務員に当てはまるように述べられていた。

今日から振り返れば、日本型経営の原点ともいえる。武士道精神も多分に盛りこまれており、いま、問われている日本人のアイデンティティーについても、余すところなく語りつくされている。働くとはそも、いかなることなのか？ 現代の社会人が等しく見失ってしまったものが、この全文の中にあっただ。

警察官は「声無きに聴き、形無きに視る」（相手がいない処でも、常にその声を聞き、相手の姿がないところでも、その姿見るかのようにする）の態度で「国民の楯となって、死ぬ」という川路の叱咤激励の言葉でもある。

1878年3月北海道開拓使長官黒田清隆夫人が亡くなった。世間では酒乱した清隆が夫人を斬殺したという噂が広がった。政府も真相究明の調査を迫られた。川路は検死官を伴って黒田夫人の墓の棺を開いて、他殺の形跡なしと断定し棺の蓋を閉じた。

これに対し同年5月大久保が紀尾井坂で暗殺されたとき刺客たちは斬姦状に、大久保等の罪状のほか川路の名をあげて「法律ヲ私スル」として仲間を庇い事件をもみ消したと非難した。

川路は故郷に戻るまでに没後120年の長い月日を要した。同じく地元で人気のない大久保利通は100年を要した。二人とも鹿児島では「故郷に刀を向けた男」、「西郷の恩を仇で返した男」として長年受け入れられなかった。

しかし、明治政府の成立間もない極めて不安定なあの時期に、現実を見極め前向きで西南戦争に対処し、国作りに取り組んだ二人の活躍がなければ新政府は空中分解し、牙を砥いで虎視眈々と植民地化を狙っていた西欧諸国につけ込まれた可能性が大きい。この点から考えると、二人の近代国家建設への功績は計り知れないものがあり、薩摩の誇る第一級の人物といえる。

39 薩摩藩士の対決（修正中、後半未完成）

外部から見れば薩摩士族は、一枚岩で一致団結して明治維新や西南戦争に取り組んでいたように見えるかもしれない。しかし実際には士族間には大きく分けて二つの身分格差による対立が深く潜在していた。一つは久光を取り巻く門閥や上級士族よりなる上士と、西郷、大久保などが属して

いた下級士族等を中心とする城下士間の確執である。もう一つは城下士と、それ以下の身分である郷士、与力、足軽との間のそれである。栗原隆一の著に従って、まず廃藩置県で特権を失った不平上士達の城下士西郷一派に対する抗議を見てみよう。

上士グループは、斉興の後継者選びの際久光を支持したお由羅派、門閥派であり、久光を中心として公武合体を目標とし、廃藩置県で士族の特権が廃止されたことに不満を持ち続けた。その中には、西郷を中心とする薩摩軍が西南戦争に出陣する際、西郷と政府の私闘に過ぎないと冷やかな視線を送った者もいた。

城下士グループは、後継者選びでは斉彬を支持した勢力で貧乏士族よりなり、倒幕を目標とし精忠組や私学校の主な構成員で、新政府で活躍して出世した薩摩人の大半は城下士出身である。

特権を失った久光を取り巻く門閥上士達は、事あるごとに西郷一派を攻撃した。久光の忠実な側近を任ずる奈良原繁、海江田信義、中山尚之介、伊地知貞馨らも、藩制時代の私怨を込めてあの手この手で西郷一派を攻め立てた。この伊地知貞馨は西郷が蛇蝎の如く嫌った男である。

事態を憂慮された明治天皇は西郷の身を案じられて、廃藩置県から一年目の明治5年7月彼を近衛都督・元帥そして陸軍大将に任命された。この措置は全国不平士族の鎮圧に権威を持たせるのが狙いであった。折りしも巷では、薩摩門閥上士達が封建守旧族を自任する島津久光を擁して大挙上京し、西郷参議を暗殺して元の娑婆に戻すという噂が流れていたことにも拠る。

門閥守旧派にとって西郷は過去2回の遠島を受けた前科者であり、新政府の参議といっても一介の成り上がり者に過ぎない。その唾棄すべき男が参議、近衛都督、陸軍大将と文武の頭職を得るに至ってはもはや僭上の沙汰と言わねばならぬ。しかも彼は廃藩励行のみか、鹿児島県士族の禄制の特別優遇措置すら絶対認めないというではないか。

「ちえすと！ 叩っ斬るべし！」

と、激怒した彼等は明治6年春久光を擁し、県令大山綱良、県参議奈良原繁らを先頭に、250人がちょんまげ姿に両刀を腰にさして颯爽と上京してきた。その目的は廃藩置県の張本人西郷とその後ろ盾になった薩摩出身近衛将校の問責である。返答次第では刀の錆にしてくれんという意気込みが陰しく吊り上った眉字に漲っていた。

幕末を再現したような反動デモに往き交う東京市民は驚いた。近衛の屯営は殺気に孕んだ異様な空気に包まれ、西郷危うしとみて部下の猛将達が押っ取り刀で駆けつけた。

近衛軍司令長官の篠原国幹は大山綱良、奈良原繁を別室に呼ぶと、爛々と輝く眼で見据え、「おはんなら、国家の政策にお従いならんと打つ殺しもんど！」と大喝した。横から桐野利明がこれまた「打つ殺しもんど！」と凄い形相で睨みつけた。大山と奈良原は拳銃を手にした青年将校に周囲を取り囲まれ、如何に彼等が示現流の達人でもこれには手出しの術がなく、おっかなびっくりで早々に帰郷した。

篠原国幹は薩摩の誇る軍人であるので、少々脱線して説明する。

彼は西郷、大久保等明治維新の功労者が多数誕生した加治屋町の出身である。24歳のとき精忠組の一員として、有馬新七等と脱藩討幕を企てたが久光の鎮圧により失敗した（寺田屋事件）。時を経て、彼は陸軍少将として近衛軍司令官を務めた。西郷の下野に伴い、退官して鹿児島に帰り私学校で青年子弟を養成した。

西南戦争では薩摩軍の一番大隊長として陰面緋色の外套を羽織り白銀造りの太刀をかざし陣頭指揮に当たったが、狙撃されて戦死した。西郷は彼の戦死の報に接すると声を上げて泣いたという。西南戦争の戦死者を祀った南州神社では、西郷を挟んで左手に桐野、右手に篠原の墓石が鎮座している。

篠原は血気盛んで人望の厚い薩摩軍人であるが、沈着冷静で無口で統率力抜群の軍人であった。そのため近衛司令長官を辞任するに当たっては、大久保利通はおろか明治天皇までこの逸材を引き止めさそうとしたが、それらを振り切って西郷と行動を共にした。長州の将校団も彼の辞任を惜しんだと伝えられている。

千葉県に「習志野」なる地名がある。習志野市史によれば、その名の謂れは次の通りである。明治6年天覧大演習が行われ際、篠原少将の凜とした見事な統率振りに心を打たれた明治天皇が、「今後軍人はすべからず篠原を鑑として見習え」といわれ、この地を「篠原に習え」ということで「習篠原（ならしのはら）」と命名された。その後「習志野原」から変化して「習志野」と呼ぶようになったという。

彼の無口も有名で、熊本隊の池辺吉十郎大隊長が篠原を訪問した際、・・・・・・・・

・・

次に城下士と郷士の対立について述べる。

（後日、引き続いて、城下士と郷士の対立について述べる。新政府になっても、近衛兵は城下士から、警視庁の羅卒は郷士からの身分差が残っていた。西南戦争でも両者の対立は深く潜在し、郷士の多くは最後まで西郷とともにすることなく、数百名を擁する出水の郷士軍の例のように、政府軍に降っている。これらのことは、余り知られていない。）